解説

FRONT PAGE • ものづくり産業を支える仲間たち

“被災地の人たちの手となり、足となり”

連合救援ボランティア・第１次派遣団の活動を終えて

電機連合　中央執行委員　高浜 昌之

東日本大震災から20日後に始まった連合救援ボランティア。その第１陣として、福島県へ向かう派遣団に参加することになった。3月11日の震災以降、連日のように被災地の様子を報道で見る中、「自分も何かをしなければいけない」という思いに駆られた。しかし、被災地でのボランティア経験が無い自分には、何をどうすれば良いのか分からない。その矢先、連合派遣団の概要が伝わり、体力勝負なら役に立てるはずと、志願した。８泊９日に渡ったボランティア活動の一端を報告する。

3月31日午前11時、東京・お茶ノ水の連合本部に集まった電機連合第1次派遣団10人は、福島県へ出発するにあたっての説明を連合本部より受けていた。挨拶に立った古賀連合会長は、「本日より連合ボランティアの第1陣が始まる。被災地の復興に向けて、まず先鞭をつけ、道筋を作って欲しい。社会の一員として、その責任と役割を果たすことに力を貸していただきたい」と述べた。

この第1次派遣団には、各組織の先遣隊として、今後数カ月に渡るだろうボランティア活動に対する多くの情報とノウハウを自組織に持ちかえる役割と責任を受けた仲間が集まっていた。

午後5時、ベースキャンプとなる連合福島に到着。受け入れ式では、連合福島の影山会長が代表し、「福島県の被災地では、原発事故により、復旧、復興に遅れが出ている。避難所の人たちは、人手を必要としており、皆さんの支援をお願いしたい。3万人の避難者の手となり、足となって欲しい。」との挨拶があった。

海沿いの民宿の瓦礫撤去作業

翌日からの実働7日間にわたる活動の拠点は、相馬市。ベースキャンプからは、約60km。毎日往復3時間を掛け、“通勤”することになる。相馬市では、災害ボランティアセンターから毎日、作業指示を受けることになった。

初日、2日目は、「松川浦港の造船所で瓦礫撤去」。市街地から港へ移動する中、景色が一変する。瓦礫の山が道路にまで溢れている。テレビを通して相馬の映像を見ていたとはいえ、目の当たりにすると、その悲惨な状況に息をのむしかない。まさに被災地の最前線にきたというのが実感だった。

3日目は、国道6号線近くのスクールゾーンを覆った土砂の撤去。4日目は、イチゴ畑の整地作業。5日目は、避難所となる小学校の体育館でのパーティション作業。6日目は、工場に集積された各地からの支援物資の仕分け作業。7日目は、海沿いの民宿の瓦礫撤去。（詳細は、電機連合ホームページ　http://www.jeiu.or.jp/shinsai/）

作業終盤には、これまでの数日間での経験から、10人が自分の役割を十分に理解し始めていた。ショベルで土砂と瓦礫をすくう者、工具を使って解体する者、一輪車で運んで廃棄場所へ捨てる者、何度も何度も作業を繰り返し、着実に瓦礫を撤去していく。たった10人のチームなのに、この10人が力を合わせ、アイデアを出し合い、できることをやれば、たった10人でも大きな成果が得られる。私は、何か不思議なものでも見るように、土砂もがれきも片付いていく様を見ていた。

実にさまざまな活動をした7日間だった。とても中身の濃い時間だった気がする。当初聞かされていた活動とは、少なからず内容も危険度も違った。しかし、これは当たり前のことなのだろう。ボランティア活動は現地のニーズで、どのような作業にも変わっていく。「被災地の人たちの手となり、足となり」どのような要請にも応えられるよう、常に、派遣団には柔軟な対応が求められるのだ。

スクールゾーンの土砂の撤去作業

各地からの支援物資の仕分け作業

相馬の地で生活再建を果たしていく人々のこれからの苦労は、想像を絶するものに違いない。しかし、いつの日か以前にもまして力強く生きている人々の姿を想像し、この地での再会を約束をして、我々は相馬を後にした。

表紙写真

被災地の復興に向けた活動はまだまだ長丁場で、これからが本当のスタートです。私たち連合ボランティアは本当に頼りにされているので、切れ目なく、最後までやり続けなければならないと感じました。ボランティアとして現地に入れる人だけでなく、本部で対策を練る人、支援物資を準備する人、職場で仕事をカバーしてくれる人、政策面で被災者を助ける人など、立場は違っても、労働組合全体で復興をめざしていることをあらためて噛み締めました。頑張る、ニッポン！
（文：基幹労連・西野ゆかり、撮影：基幹労連）

EDITERS from

◆まずもって、東日本大震災で被災された全ての方々にお見舞い申し上げます。３月11日に東日本大震災が勃発し、我々の生活も大きく変化した。３月中は、計画停電の影響で、通勤電車が走らなかったりして、電車の来る駅まで１時間以上歩いたりして事務所に通勤。少しでも電力確保のためにと、事務所内でも窓際や端の蛍光灯ははずして、暖房もつけず、ホカロンや膝掛けで、節電に心がけた。

◆今号では、特集として、「ＴＰＰ推進とものづくり強化」をテーマに組んだ。震災直後のインタビューのため、今回の震災への対応も踏まえた話を聞くことができた。いずれにせよ、日本として、今回の震災というピンチをバネに、世界一安全・安心な国に脱皮するしかない。その原動力はまさしく、我がものづくり産業であることは間違いない。

◆「冬の次には必ず春が」の言葉通り、気候も、そして被災した現地の人々にも春が一日も早く来ることを願いつつ。（美）

SPRING issue [春号]

発行所●IMF-JC（金属労協）
東京都中央区日本橋２-15-10 宝明治安田ビル 4F
TEL.03-3274-2461　FAX.03-3274-2476

発　行●2011年4月30日（年2回）No301
編　集●IMF-JC 組織総務局
印刷所●太平印刷（株）